第 21 回 沖縄科学技術大学院大学学園の今後の諸課題に関する検討会
議事要旨

１．日時：令和 2 年 1 月 28 日（火）10:00～12:30
２．場所：中央合同庁舎８号館８階特別中会議室
３．出席者
（１）構成員
相澤座長、大島委員、瀧澤委員、西澤委員、野路委員、宮浦委員、山本委員
（２）内閣府
原沖縄振興局長、水野審議官、田村総務課長、中島次長、宮腰企画官
（３）OIST
グルース学長、バックマン首席副学長、吉尾 COO、コリンズプロボスト、芝田副学長、ピーチシニアアドバイザー、ジェーンズシニアアドバイザー

４．議事要旨
各委員から主に以下のような指摘・意見があった。
議事２　2020 年度事業計画案について
非公表として取り扱い。

議事３　OIST ピア・レビュー結果報告
（OIST 外部評価について）
○　今回の外部評価委員会は、私（相澤 OIST 検討会座長）とチェリー・マレイ（OIST 理事会議長）の 2 人が陪席し、透明性が確保されたのではないか。委員会の構成は、ノーベル賞受賞者、国際的リーディング大学の学長経験者等であり、世界トップレベルの研究大学を目指す OIST の外部評価にふさわしいものであった。
○　前回外部評価後における OIST 全体の教育、研究は目覚しい進捗を遂げたと評価されたが個別研究に対する評価についての踏み込みは見られなかった。全体としては、世界トップレベルの大学を目指すにはクリティカル・マスが必要であり、OIST の今後の拡大を期待するという評価委員の熱い思いが強調された印象を受けた。
○　アカデミック・ベンチャーキャピタルという概念について、ベンチャーキャピタルの概念も変わってきているところ、どのような意味で使われているのか。また、外部評価委員は endorse（支持する）という言葉を使って、技術移転が沖縄の経済発展に寄与する可能性が十分だと言っているが、この判断の基準は具体的に示していただく必要がある。
○　特許やスタートアップ、投資の実績など、日本のトップクラスの大学はみんな取り組んでいて、評価方式が間違っているというご主張も、財務省担当者はおそらく山のように聞いており、結果を求められるのが今の状況かと思う。そういった厳しい状況を理解した上で、乗り越えていくためには具体的なデータの提示や、OIST の特殊性を踏まえ取り組んできた成果を見せていく必要がある。外国から資金が集まってきているのであれば、日本の資金に期待をしないで、実績を出していくというのは 1 つの解決案だと思う。

○　外部評価委員会の学生やポスドクに関する評価は素晴らしいと思う。もう少し説明いただきたいのは、日本の大学のポスドクとどう違うか、卒業生が今どこで活躍しているか、どこの研究室に行ってどんな研究をしているのか、どんな専門分野を持っているのかなど、具体的に説明いただくと一般の人が理解できると思う。

○　（基礎資料の）分厚いデータが公開されていない。非公開のものは気を付ける必要があるが、可能な部分については委員の皆様へしかるべきデータを別途配布していただきたい。

議事４　OIST の 10 年後見直し

（各論「教育研究」について）

○　国内の様々な大学を回っていると、研究に従事している方々の人間的な素晴らしさ、挑戦する気持ちなどが創造性を発揮して、より高い研究レベルに到達するものと感じている。最先端の研究をしている先生方はすべての人が教育にも従事されているということか。また、採用の際には人間的な面の素質を見ているのか、教員になられてからトレーニングを通じて伸ばしていかれるのか。

○　研究員や教員を増やそうとしているものと伺ったが、学生の数は少ないと思う。優秀な学生が研究室にいるだけで研究が進むことでもあるので、ある程度教育しながら研究人材として育てるという意味でも、学生の数をもう少し増やすことは考えていないのか。

○　学生は研究だけでなく、違う観点を養って人生の経験の入り口に立つということも大事。そういう意味でレクリエーションサービスなどを充実させていくというのは、学内だけでなく、例えば琉球大学や他の大学、高専など他の教育機関と一緒にコラボレーションして学生の相互作用などを深めていくということは考えていないのか。

○　クオリティーを高く保持して少数精鋭の大学院教育をやるというポリシーは非常に優れていると思う。沖縄振興もそうだが、例えば 15%程度は日本人の学生枠とするようなという考え方はないのか。

○　教育について、これまで特定の分野について非常に優れた教育を行うという広報はされてこなかったと思う。（P18 の）図では生物・科学分野に一番集中しているように見えるが、意図的にこうなったのか。OIST は今後このような分野で世界的に評価を高めていって、トップクラスの研究者またはその関連業務につけるという風になってきたのか、その辺の戦略をお聞かせいただきたい。

○　教育研究という課題は大変重要なポイントであり、今後検討を進めるにあたっては外部評価委員会の結果が非常に重要な資料となる。エビデンスについては、今日見せていただいているが、各委員が手にできるように、その中から選んで供給していただけるようお願いしたい。

○　ネイチャー･インデックスという 1 つの指標で評価されていることは､十分に評価できる内容だが、サイテーションインデックスだけで研究者を評価することの難しさがある。吉尾 COO からも、指標を検討し確立するとコメントがあり、進捗状況を検討会にフィードバックいただきたい。

○　OIST が目指している研究は学際的研究であり、その結果生まれた新領域あるいは新しいリサーチの方向性などが見えないので、今後の検討課題の中で提示いただきたい。OIST が世界のトップリーディングインスティチュートとして新領域を開拓していくところを世界は見ていると思うので、OIST の強みとして強化していただきたい。

議事５　その他

（野路委員退任のご挨拶）

○　設立当初から OIST に行かせていただいたが、印象深かったことは野依先生がインタビューで言われたことと同じであり、OIST は日本の従来の大学とは異なる自由な環境があり、その中で今後も日本の伝統文化を尊重し、受け入れながらも日本の教育制度をより国際的で学際的なものへ変革する起爆剤となることを期待しているという言葉。OIST にはぜひ頑張っていただいて、世界的な発見、発明をして、また専門的な分野の人材育成を果たしていただいて、全世界で企業あるいは研究所、大学で活躍できるように、卒業生の活躍についてもフォローアップしていただきたい。OIST が成功することを祈っている。

以上